THE KYOTO UNIVERSITY MUSEUM

Newsletter No. 42

March 2018

京都大学総合博物館ニュースレター

北白川廃寺の軒平瓦と軒丸瓦（飛鳥～奈良時代・総合博物館蔵品；2ページに関連記事）

企画展紹介
　京都大学文化財総合研究センター設立 40 周年記念展示・文化財発掘Ⅳ
　「足もとに眠る京都—考古学からみた鴨東（おうとう）の歴史—」飛鳥～室町時代編 2
総合博物館コレクション研究〈2〉
　偽造された国書—重要文化財朝鮮国書の「世界の記憶」登録によせて— 4
国際シンポジウム報告
　私からみたヤンゴンシンポジウム—ただ行くだけではもったいない— 5
招へい研究員紹介 6
国立台湾大学滞在記 8
京都大学総合博物館の ARK（Archival Resource Key）機関番号取得 10
研究資源アーカイブ通信〈12〉
　ミューズ・ラボにおける映像ステーション記録映画再開 11
総合博物館日誌（平成 29 年 11 月～平成 30 年 2 月）..... 12

企画展紹介　京都大学文化財総合研究センター設立40周年記念展示・文化財発掘Ⅳ

「足もとに眠る京都 —考古学からみた鴨東（おうとう）の歴史—」

飛鳥～室町時代編

開催期間：平成30年2月14日（水）～6月24日（日）

京都大学の吉田キャンパスは，ほぼ全域が縄文時代～幕末期の各時代の遺跡の上に位置している．このため，校舎の新営など工事によって遺跡の破壊が予想される場合には，それにさきだって発掘調査をおこない，学術的記録を精密に残す必要がある．また時には，遺跡そのものを後世に伝えるべき重要な歴史資料と評価し，保存手段を講じる場合もある．文化財総合研究センターは，このような，遺跡というフィールドにおける臨床的な活動を担うとともに，出土資料の保管と活用，あらたな調査技術や研究方法の開発を総合的に実践している．

成果を紹介する展示は，これまで3年間，総合博物館の特別展『文化財発掘』I～IIIとして，それぞれ古墳，弥生，幕末と時代を限り，構内の出土品を陳列してきた．今回は，前身となる埋蔵文化財研究センターの設立から40年となることを記念し，これまでの成果を包括的に紹介するとともに，大学が所在する地域の歴史をよりひろく知ることができるよう，総合博物館や，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所（以下，「京都市埋文研」と略称する）の所蔵資料もあわせた展示を企画した．そのために，市内の調査成果を展示する京都市考古資料館と連携し，古墳時代以前とその後で分担する共同開催とし，京都大学総合博物館では，平成30年度の企画展として飛鳥～室町時代編を展示することとなった．

平安時代中期の土器・陶器（北部構内出土）

平安時代後期の青銅製火舎香炉（病院構内出土）

それでは，展示を簡潔に紹介しておこう．副題にある鴨東（おうとう）の示す範囲に，厳密な定義はないが，おもに平安京から鴨川を越えた東側一帯を漠然と指して使われている（ちなみに京阪電鉄では，三条から出町柳までを鴨東線と呼称している）．今回の展示では，吉田キャンパスのある北寄りの一帯，岡崎から北白川にかけてまでの，おおむね2 km四方程度の空間を対象とした．

展示は大きく4部構成とし，第1～3部で時代順に重要な調査成果をとりあげている．第1部「古代豪族の躍動—比叡山麓の寺院と集落—」では，飛鳥～平安時代中期，おおむね7～10世紀代の鴨東地域において，比叡山麓を拠点としていた豪族集団や，そこに住まう人々の活動の痕跡に焦点を当てた．集落として小倉町別当町遺跡があり，至近に建てられた北白川廃寺と密接に関連すると想定されている．北白川廃寺は，昭和9年（1934）に当時の京都帝国大学関係者が中心となって調査し，戦後は京都市埋文研が地道な調査を継続してきた．総合博物館所蔵の瓦類や移築された基壇，そして京都市埋文研の調査資料から，現在は完全に住宅街となった北白川一帯で繰りひろげられた古代の人々の営みを，感じていただきたい．

第2部「古代から中世へ—院政期の開発—」では，平

安時代後期，おおむね 11 ～ 12 世紀代における岡崎地域の六勝寺と白河街区，その北側の聖護院や吉田地域の調査成果をとりあげた．院政で権勢をふるった白河・鳥羽・後白河の 3 上皇の時代，この地は政治的拠点として重要な空間となり，6 つの寺院（六勝寺）や御所などが建立され，平安京に似せた街区が整備されたとされる．発掘で裏付けられたのは一部であるが，京都市埋文研による 2010 年の法勝寺塔跡の調査では，大規模な地盤改良の施工が確認され，長大な八角九重塔の実在が再認識された．出土した梵字文軒瓦をはじめ，鎮護国家を願う仏教寺院を象徴する祭祀遺物を展示する．また，吉田キャンパスでは，その頃の密教法具の鋳型や経塚が見つかるなど，寺院群の周辺地として，関連する工房やさまざまな祭祀が執りおこなわれる空間であったことが判明している．これらから，時代の転換期に重要な位置を占めた鴨東地域の姿に，思いを馳せていただければと思う．

第 3 部「中世都市京都のひろがり—近郊の屋地と葬地—」では，鎌倉～室町時代，13 ～ 15 世紀代における吉田地域を中心とした，多数の人や物資の往還する都市的な様相を紹介した．当時は貴族層の邸宅や仏堂が構えられていたとされ，西部構内では，太政大臣西園寺公経の別邸吉田泉殿に関係する建物や祭祀の遺構が見つかり，軒瓦がまとまって出土している．また，総合博物館所蔵の勧修寺家文書からは，この地の財の相続に苦心する公卿の営みを知ることができる．これらとともに，井戸や建物，墓などの多様な遺構から出土している中世の各種土器・陶磁器類や道具類を一堂に会した展示から，当時の人々の暮らしぶりを味わっていただきたい．

そして第 4 部「京都大学構内における発掘調査と研究」では，文化財総合研究センターの紹介とともに，構内遺跡の調査が学術的な進展にとくに重要な役割を果たした，鋳造遺跡研究と古代～中世土師器の編年をとりあげた．吉田南構内で見つかった梵鐘鋳造土坑の調査と研究は，その後「鋳造遺跡研究」という分野が定着していく際の指針を提供する重要な意義をもつものであった．そして，構内から出土した土師器の編年研究は，黎明期であった日本の中世考古学に実証的な時間軸を呈示する先駆的事例であり，その後の研究基盤となった．今回の展示が，構内遺跡の調査と研究のもつ学術的意義を知っていただく機会となれば幸いである．

鎌倉～室町時代の各種容器や道具類（構内各所出土）

発掘調査や出土品の管理を担当する機関が異なるとしても，当然ながら地中の遺跡はそれに対応して存在するものではない．ある空間の歴史を総合的に理解するためには，機関や所属の垣根を取り払って資料をとりあつかうのが望ましいのは明らかだけれども，実際にはさまざまに困難がつきまとう．今回の共同開催で，関係機関の多くの方々のご尽力でそれが実現できたことに，厚く御礼申し上げたい．京都市考古資料館での旧石器～古墳時代編とあわせてぜひ展覧いただき，足もとに眠る京都の歴史の奥深さを感じていただければと願っている．

（文化財総合研究センター 助教　伊藤淳史）

（総合博物館 准教授　村上由美子）

平安時代中期の梵鐘や鏡の鋳型（吉田南構内出土）

平安時代中期の土馬（吉田南構内出土）

総合博物館コレクション研究〈2〉

偽造された国書

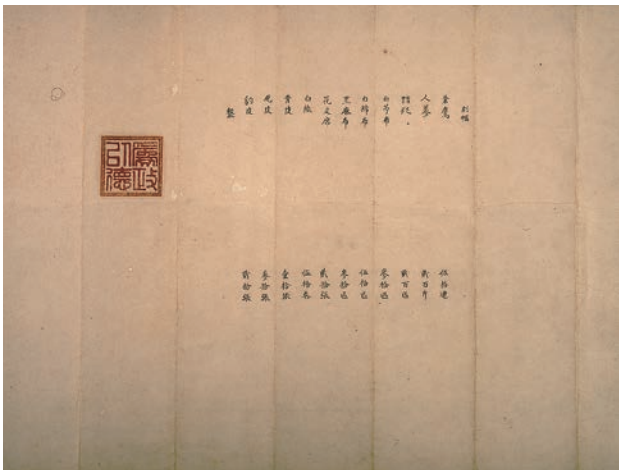
—重要文化財朝鮮国書の「世界の記憶」登録によせて—

2017 年 10 月 31 日，「朝鮮通信使の記録—17 世紀～ 19 世紀の日韓間の平和構築と文化交流の歴史—」が，ユネスコの「世界の記憶」（旧・記憶遺産）に登録された．「世界の記憶」とは，世界的に重要な文書や絵画などの記録物への認識を高め，保存やアクセスを促進することを目的として，ユネスコが 1992 年に開始した事業である．

朝鮮通信使は，1607 年から 1811 年までの間に 12 回派遣され，16 世紀末の豊臣秀吉による朝鮮出兵により断絶した日本と朝鮮との国交を回復し，両国の平和的な関係を維持することに貢献した．ソウルを発した使節は，釜山から海路対馬を経て，瀬戸内海を通り，大坂で上陸し，陸路江戸へと向かった．長い道中では，使節団と地域の人びととの様々な交流があり，筆談唱和集，詩文，書画などが大量に作成された．登録の対象とされたのは，日韓両国に残る外交文書・旅程の記録・文化交流の記録で，その数は，日本 48 件 209 点，韓国 63 件 124 点にのぼる．

当館が所蔵する朝鮮国書—朝鮮通信使が徳川将軍に届けた朝鮮国王の書簡—は外交文書の内の一件．表題に記した通り，偽物であり，しかし偽物であるにも拘わらず，両国の外交上きわめて重要な意味を持った，なんとも不思議な文書である．

時は，秀吉の朝鮮出兵にさかのぼる．朝鮮半島に甚大な被害を与えたこの戦争の後，日朝関係は断絶した．中世以来朝鮮との貿易に経済基盤を置いていた対馬藩にとっては死活問題である．国交回復を急ぐ対馬は，「日本国王源家康」名義の文書を幕府に無断で作成し，朝鮮国王に送った．



李昷別幅　1607 年（万暦 35）　贈品リスト

李昷書契　1607 年（万暦 35）「国書」の本文

その「国書」に応える使節が 1607 年（慶長 12）に来日したのだが，使節が持参した朝鮮国王李昷の国書は，当然ながら，家康から送られてきた書簡への返事である．もしこれがそのまま将軍に届けば，家康の書簡を偽作したことが露見する．つじつまが合うよう対馬藩が書き換えたのが，現在，当館が所蔵する「国書」である．この「国書」を，二代将軍秀忠が受け入れたことにより，日朝の国交回復が実現．善隣友好をうたう日朝間の関係はこうして幕を開けたのであった．ちなみに，この偽造は後に露見するも，三代将軍家光は，対馬藩の重臣柳川氏を有罪とし，二度と偽作できないような仕組を作り，藩主宗氏はお咎めなしに終わった．

実は，本書が偽造であるとの確定は，日韓両国政府の合意の下，2002 年に始まった日韓歴史共同研究によってなされた．この成果は，「国書」の重要文化財の指定に大きく貢献した．また，今回の「世界の記憶」への登録は，日本の NPO 法人 朝鮮通信使縁地連絡協議会と韓国の財団法人 釜山文化財団の協力により実現したものである．2011 年度に修理を終え，公開の準備は整っている．両国の親善の証ともいうべき「国書」が，両国の友好のために役立てられるよう念じている．

（総合博物館 教授　岩﨑奈緒子）

国際シンポジウム報告

京都大学国際シンポジウム

総合博物館は 2017 年 12 月にミャンマーのヤンゴン大学において，京都大学・ヤンゴン大学国際シンポジウムおよび日本学術振興会研究拠点形成事業第 7 回アジア脊椎動物国際シンポジウム（AVIS7）を開催しました．12 月 5 日に行われたシンポジウムは「脊椎動物種多様性のアジア多国間研究ネットワーク」と銘打ち，①博物館の重要性と各国の博物館の現状，②アジア脊椎動物多様性，③アジア多国間研究者ネットワーク形成をキーワードとして 9 か国 19 人の研究者が講演しました．12 月 6 ～ 7 日に開かれた AVIS7 では，9 か国 48 人の若手研究者が研究発表を行いました．どちらのシンポジウムにも数回ずつ休憩時間があり研究者同士の良い交流の場となっていました．

これらのシンポジウムにおける私の目標は，アジア圏の爬虫両生類研究者たちとコミュニケーションをとり，自身の研究ネットワークを作ることでした．このような国をまたいだ研究交流こそがシンポジウムの根幹であり存在意義でもあるように思います．しかし参加者の中にはこの点を重視していない人も少なからずおり，私は彼らの姿勢を大変もったいなく感じました．

なぜアジア生物多様性研究には国境を超えた研究者間ネットワーク形成が必要なのでしょうか．これに答えるには，アジアの脊椎動物学の現状について 2 つの問題点を考える必要があります．まず 1 つ目は，今回のシンポジウムの参加者が専門とする分類学や行動学といった基礎的な分野を研究するアジア人が非常に少ない点です．2 つ目はアジア人研究者間のネットワークの希薄さです．アジア人研究者同士の共同研究は少なく，代わりに欧米人がアジアでの研究成果を報告している論文を多数見かけます．しかし，欧米人の研究は特定の国単位の狭

AVIS7 初日のグループ写真

い地域をターゲットとしたものが多く，アジア全体には手を広げきれていません．アジアの脊椎動物多様性の全体像を明らかにするには，自国の動物相について詳しいアジア人研究者たちが，国をまたいで協力することが不可欠です．その基盤としてアジア人研究者間に密なネットワークを形成するための交流の場を作ることが必要です．今回の国際シンポジウムこそがその場であると私は思いました．具体例として私がどのようにネットワーク作りをしたかというと，当日のコーヒーブレイクや昼食の隙間時間を利用して議論を交わしました．その結果，彼らと仲良くなり，人によっては一緒にフィールドワークに行く約束もしてくれました．今でも互いに連絡を取り続けています．

今後もこのようなシンポジウムがアジア人研究者の貴重な交流の場として継続されることを切に願っています．私は今後も国際シンポジウムや学会に積極的に参加して自身の研究ネットワークを広げていきたいと思っています．最後に今回のシンポジウムを主催してくださった京都大学総合博物館の本川雅治教授ならびにヤンゴン大学のティダ・レイ・スィー教授に感謝申し上げます．

（理学研究科 修士過程 1 年　岡部晋也）

京都大学国際シンポジウムの集合写真

招へい研究員紹介

Boris KRYSTUFEK 客員教授（2017 年 1 月 1 日～ 10 月 31 日）

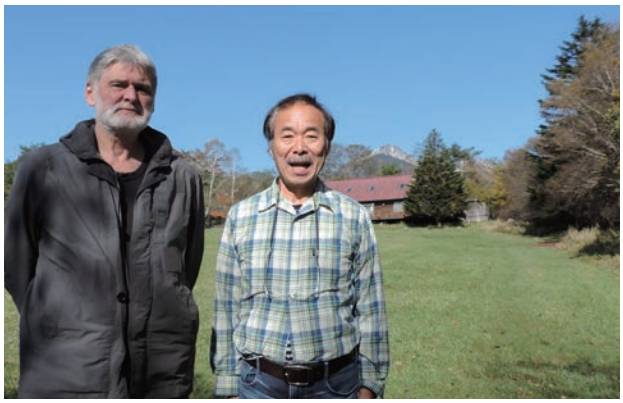
Professor of Zoology, Scientific Councillor, Senior Curator, Head of Vertebrate Department, Slovenian Museum of Natural History

I met Dr. Masaharu Motokawa, who in 2017 invited me to Kyoto and acted as my scientific host there, in spring 2002 during my stay in the Natural History Museum London. Although we were maintaining contacts ever since then, his invitation to spend four months at the Kyoto University Museum (KUM) as a Visiting Professor, came as surprise. Anyway, the invitation was attractive for several reasons. Firstly, I was well aware of the central role of the Museum in the Asian Vertebrate Species Diversity Network Platform, a large-scale project combining researchers, museum vouchers and information on large geographic expanses of Southern and Eastern Asia. Being primarily a museum curator I was most keen to learn more about such a complex engagement. Secondly, I was (and still am) in the middle of a taxonomic revision of the Palaearctic rodents. It was therefore a challenging opportunity for studying representative samples of species endemic to the Japanese islands. Equally attractive was the prospect of an access to publications from Japan and adjacent regions. Both resources are scarce in European museums. The Kyoto University proposed the project of "Systematics and biogeography of Old world mammals" which perfectly matched my primary research interest on the one hand and allowed lot of academic freedom on the other hand. The third reason was an invitation by the editors of the Handbook of the Mammals of World (Lynx Ediciones Publications, Barcelona) to draft the account of the mole family (Talpidae) for Volume 8. The deadline was October 31, what was also the last day of my stay at the Kyoto University. I therefore saw the engagement in the Handbook as an opportunity to collaborate closer with my scientific host and therefore proposed him to co-author the account. Back to our first meeting in London, Motokawa-san was deeply engaged in mole systematics and phylogeny, and published afterwards important contributions on this topic. All the circumstances therefore seemed to match perfectly and Motokawa-san accepted my invitation.

At KUM, I attended the International Symposium "University Museums: Collections, Museum Science, and International Network" with a talk "Who cares about the natural history collections?" and a seminar with presentation entitled "Pattern and Process in the Balkan biodiversity: A mammalogist's perspective". During my stay in Kyoto I had good opportunity of visiting various institutions across Japan: the National Museum of Nature and Science in Tokyo and Tsukuba, the Primate Research Institute of the Kyoto University and the Japanese Monkey Centre and Zoo for non-human primates in Inuyama, the Hokkaido University in Sapporo and museums attached to it, and the KEEP Museum of Japanese dormouse (Yamane) in Yamanashi. As a member of the Mammal Society of Japan, I attended its annual meeting organized by the University of Toyama, with a talk "The long-tailed Nesokia. Enigmatic rat from the Garden of Eden". My last talk in Japan was on the Edible dormouse in Slovenia for research staff of the Yamane Museum and their external volunteers. In July I joined my research host in his trip to Taiwan, where we visited the National Taiwan University in Taipei, the Taipei Zoo, the Endemic Species Research Institute in Chi Chi, the Thungai University and the National Museum of Natural Science in Taichung. At the National Taiwan University, I gave a talk on the mammalian diversity in the Balkan glacial refugium, and attended with a similar topic the International mini Symposium "Biology of small mammals" at the Thungai University. A visit to the mammal collection in the National Museum in Taichung offered an opportunity to study endemics from the mountains of Taiwan, which show clear Palaearctic affinities.

My research stay at the Kyoto University gave me many opportunities to experience the academic atmosphere in Japan in particular and the Japanese way of life in general. There was lot of friendly attitude and readiness to assist my needs, both at the University and outside it. I would like to stress two particularities. The first was warm attention of PhD Students at KUM, with whom I spent most pleasant time. The most memorable however is my stay in Yamanashi as a gust of an old friend Dr. Shusaku Minato. In Europe, Minato-san enjoys reputation for achievements in research and conservation of Yamane, a Japanese dormouse (*Glirulus japonicus*). In the past, he visited me on several occasions and spent some time on my plot for monitoring the edible dormouse (*Glis glis*). This was the first time we met in Japan, and the hospitality was extraordinary. I was particularly pleased to hear that Minato-san got the idea to establish a Dormouse Museum on the KEEP premises in Slovenia. Quite probably, there are only two museums worldwide devoted to dormice, one in Japan and the other in Slovenia.

BK with Shih-Wei Chang in the Mammal Collection of the Endemic Species Research Institute in Chi Chi, Taiwan.



Reunion in Japan: BK with Shusaku Minato in front of the KEEP Yamane Museum in Yamanashi Prefecture.

陳 韋仁 Wei-Jen CHEN 客員准教授（2017 年 12 月 1 日～ 2018 年 2 月 28 日）

Professor, Institute of Oceanography, National Taiwan University

WJC received his Ph.D. at the University of Paris 6 (UPMC) in 2001 with his thesis work (molecular phylogeny of the spiny-rayed fishes) conducted in the National Natural History Museum of Paris (NMHN) in France. He holds his present position as a full professor at National Taiwan University (NTU) since August 1, 2017. He is currently a faculty number of the Institute of Oceanography (IO) from the College of Science, and the Department of Life Sciences (joint position). He is the principal investigator of the Marine Biodiversity and Phylogenomics Laboratory established at IO since 2009 and the fish curator of the NTU Museums since 2012.

WJC's work and research interests can be summarized as the application of molecular and computational tools within a phylogenetic framework to interpret organismal diversity and to understand mechanisms of evolution. Four axes of research ongoing in his lab are: phylogeny (evolutionary relationships) of marine ray-finned fishes and gastropods at both large and small scales; evolutionary genomics (especially, the studies on species diversification in relation to gene/genome duplications); biogeography (with emphasis on marine species in the Indo-West Pacific); and marine biodiversity exploration (coral reefs and tropic deep-sea benthos).

It is WJC's great honor to be invited a visiting researcher in the Kyoto University Museum (KUM) to conduct the research collaboration work with the young talent ichthyologist Dr. Naohide Nakayama of the museum working on the systematics of deep-sea fishes, with particular emphasis on the gadiform family Macrouridae, and to share the knowledge with faculty members and students in the museum and in the Division of Biological Science through two seminar talks. One of the talks was about the progress on the research of fish systematics through the Tropical Deep-Sea Benthos Program—a biodiversity exploration program led by French teams which has been run for more than forty years since 1976.

The deep-sea, which is generally referred to the water masses below 200 meters at depth where visual lights cannot reach, is the most extensive ecosystem on earth, but it is yet poorly studied. Actually, the deep-sea floor has long been thought to be infertile and such kind of “knowledge” was only challenged by the great historical expeditions at the end of the 19th century, notably the circumnavigations of the HMS *Challenger* (*Challenger* Expedition of 1872–76). The results of this expedition demonstrated that life is present and diverse at every depth in the oceans.

Many deep-sea fish species were described based on specimens collected in the waters around Japan through some of historical expeditions as well as modern efforts by Japanese researchers. Visiting the Kyoto University Museum is, therefore, a good chance to WJC to work on the diversity of the deep-sea fishes in Japan. He also benefits from this stay to conduct a field trip in Kochi for collecting deep-sea fish samples in Tosa Bay and for visiting Prof. Hiromitsu Endo’s marine biology laboratory in Kochi University—a university with a long-standing history on ichthyological research, especially on deep-sea species. During the trip, over three hundred fish specimens in 76 families were collected. The tissue samples from the specimens were also preserved and will be processed for molecular work. This collection will become an important reference and serve as valuable comparative material for the future ichthyologic research, especially cooperative projects between Taiwan and Japan.

KUM is one of the most excellent and successful university museums in Japan. It provides research material for the researchers and students from around the world. The faculty members also provide outstanding outreach activities to the general public through education and exhibition to demonstrate the importance of the museum collection related to culture, biodiversity, conservation, anthropology, and technology. WJC took his advantage of this visit and the intellectual exchange with Prof. Masaharu Motokawa, to learn much more about curatorial management of natural history specimens and museology. This experience will be beneficial for him for the future development of NTUM. We are also hopping that the partnership between KUM and NTUM can be enforced through existing bilateral cooperation program and a platform of additional academic collaboration between their museums can be further established. Finally, WJC deeply thanks the KUM’s warm invitation and hospitality during his stay.

WJC collecting fish samples in Kochi.

Diversity of deep-sea fishes and other marine organisms in Tosa Bay.

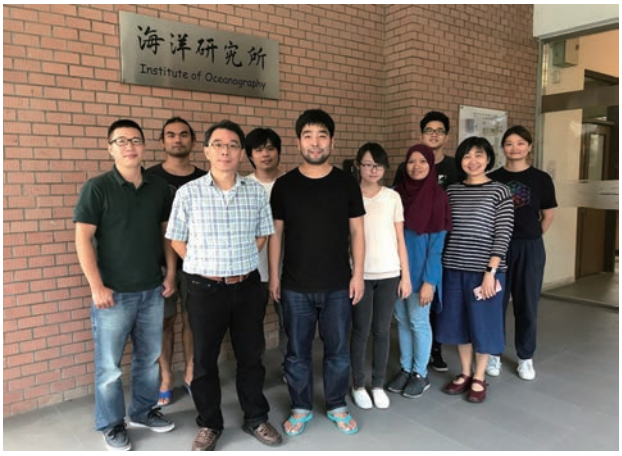
国立台湾大学滞在記 （2017 年 10 月 15 日～ 11 月 13 日）

京都大学と国立台湾大学は 2014 年 9 月に「京都大学と国立台湾大学との研究者交流事業に関する合意書」を締結し，2015 年度より研究者の交流事業を実施しています．このたび，本事業に基づく派遣研究者として，2017 年 10 月 15 日から 11 月 13 日まで国立台湾大学に滞在し，深海性魚類（以下，深海魚）の多様性解明に向けた共同研究体制の新たな構築と，両学大学博物館の連携強化に取り組みましたので報告します．

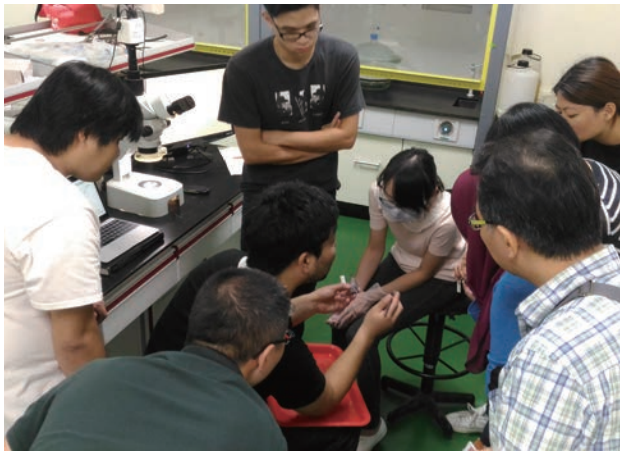
今回の滞在では，国立台湾大学海洋研究所の Wei-Jen Chen 教授に受入先となっていただきました．Chen 教授は魚類の多様性研究をリードする気鋭の研究者で，海洋研究所で Marine Biodiversity and Phylogenomics Laboratory を主宰するとともに，生命学部の兼任教授も努められています（前ページをご覧下さい）．私が Chen 教授に初めてお会いしたのは昨年の 2 月のことでした．知り合いのポスドクが彼の研究室に所属していた縁で，標本の観察と野外調査の拠点として研究施設をお借りしたのが始まりです．そのときの滞在は 3 日間という短いものでしたが，お互い深海魚の系統分類や生物多様性を専門としていたこともあり，すっかり意気投合して将来的な共同研究の可能性を熱く議論しました．しかし，時間的な制約から具体的な研究の方向性を定めることはできませんでした．

今回の台湾再訪は，上記の共同研究を実行に移す絶好の機会となりました．1 ヶ月の滞在はあっという間でしたが，深海魚の進化史や形態の多様化パターンの解明に向け，互いの専門分野を統合した研究の可能性を議論するには十分な時間でした．また，深海底に生息する魚類のなかで最も種多様性の高いソコダラ科（深海にすむタラの仲間）を対象に，実際の共同研究をスタートすることができました．国立台湾大学には，南シナ海，中部西太平洋，南西インド洋で採集された世界的にも貴重な深海魚の標本と遺伝的分析用の組織サンプルが膨大に保管されています（Chen 氏は国立台湾大学動物学博物館の魚類標本コレクションの管理者でもあります）．私たちのプロジェクトではこれらの充実したコレクションを活用し，形態分類学（中山）と分子系統学（Chen 氏）の知見を合わせて，ソコダラ科の主要グループの系統進化と形態形質の多様化パターンを明らかにしたいと考えています．のべ 1 ヶ月の滞在期間を通し，海洋研究所と動物学博物館に保管されているソコダラ科のほぼすべての標本（およそ 570 個体）を形態形質から再同定し，一

国立台湾大学魚類標本館にて Chen 教授らと



国立台湾第大学海洋研究所にて Chen 教授のラボメンバーと


国立台湾大学海洋研究所で行った深海魚の同定ワークショップ

部の種については詳細な形態観察を行いました．また，台湾北東部の大溪（Da-xi）と南方澳（Nang-fang-ao）を訪問し，漁港に水揚げされた漁獲物の中からソコダラ科の生の標本を採集しました．一連の共同調査の結果，科内最大のグループであるトウジン属において，未記載（新種）の可能性がある複数種を確認するとともに，属内の系統関係の解明に必要な標本と組織サンプルを確保することができました．得られた結果は，随時学術論文として公表していく予定です．

今回の滞在では，国立台湾大学の学生と活発に交流できたことも新たな収穫でした．普段の海外調査では自分の研究を優先してしまい，現地の学生との交流がおざなりになってしまいがちです．滞在中はラボのメンバーと毎日顔を合わせ，台湾の大学生事情や日本との違いなどをネタに会話に花が咲きました．また，海洋研究所でソコダラ科の分類と同定に関するセミナーとワークショップを開催し，海洋研究所に所属する他の研究者や学生と学術交流を行うことができました．

京都大学総合博物館は 2013 年から国立台湾大学博物館群と部局間学術協定を結び，研究スタッフの交流や社会連携を含めた博物館学の共同研究を精力的に展開しています（本誌 30 号 2–3 ページおよび 23 号 6 ページをご覧下さい）．今回の滞在のもう一つの目的は，国立台湾大学博物館群のスタッフと交流し，これまで育んできた部局間の国際交流のさらなる深化をめざすことでした．実は Chen 教授の他にも，国立台湾大学博物館群のスタッフの中に以前からの知り合いがいました．昨年の春に招へい外国人学者として総合博物館に滞在された生命学部の Hon-Tsen Yu 教授です．Yu 教授は哺乳類がご専門で，国立台湾大学博物館群の活動にも深く関わられています．今回の滞在中に，Yu 教授から校史館，動物学博物館，植物学博物館などのスタッフを新たに紹介していただき，両博物館が抱える問題点について共有・議論することができました．また，将来にわたって協力関係を強固にすることの重要性について再確認することができました．

今回の学術交流には続きがあります．昨年 12 月から 3 ヶ月間，受入研究者の Chen 教授を総合博物館の客員准教授として招へいし，上記の派遣で新たに構築した連携体制の発展を目指しました．ソコダラ科のトウジン属に関する研究では，私の台湾滞在中に形態形質に基づく標本の調査・検討がほぼ完了していました．そのため，京都での招へい期間中は遺伝的分析を中心に共同で研究を行いました．また，総合博物館や理学研究科でのセミナーなどを通し，Chen 教授と京都大学スタッフとの交流促進も図りました．一連の派遣と招へいが契機となって，京都大学と国立台湾大学の学術交流が活発になり，総合博物館の国際展開がますます発展することを願っています．

（総合博物館 特定助教　中山直英）

国立台湾大学生命学部にてスタッフと

国立台湾大学植物標本館にてスタッフと

国立台湾大学校史館にて Chang 館長と

京都大学総合博物館の ARK（Archival Resource Key）機関番号取得

京都大学総合博物館は，永続識別子の一つ，ARK（Archival Resource Key）の名前割り当て機関番号 NAAN（Name Assigning Authority Number）を，2017 年 10 月 4 日に取得しました．その番号は，「62587」です[※1]．ARK の世界で固有の番号です．

ARK（Archival Resource Key）とは，2001 年 3 月に米国国立医学図書館で開発され，カリフォルニア・デジタル・ライブラリ CDL で維持管理されている URL スキームで，任意の種類のオブジェクト（デジタルオブジェクトと物理的オブジェクトの双方）を識別するために設計されました[※2]．NAAN を持つ機関は，その番号の下にオブジェクトをあらわす名前を割り当てることができます．名前を割り当てられたオブジェクトは，その機関が責任を持つオブジェクトとして特定できます．

オンライン上の文献の識別に使用される DOI やハンドルシステムと似たような存在と言えますが，異なる特徴も持っています．たとえば，京都大学学術情報リポジトリ KURENAI では，ハンドルシステムで，京都大学総合博物館ニュースレター（本誌）を「http://hdl.handle.net/2433/192945」と表示しています．「2433」の部分が KURENAI であることを示し，「192945」の部分が本誌であることを示しています．これが総合博物館の学術雑誌掲載論文等だと，「http://hdl.handle.net/2433/138093」となり，「2433」は同じでも「/」以下が異なります．KURENAI の下に並列して存在し，あいだに総合博物館の単位はありません．

ARK は，つぎのように図解されています[※3]．

```
http://example.org/ark:/13030/654xz321/s3/f8.05v.tiff
 \_______________/ \__/ \___/ \______/ \____________/
   (replaceable)     |     |      |       Qualifier
        |       ARK Label  |      |    (NMA-supported)
        |                  |      |
Name Mapping Authority     |    Name (NAA-assigned)
(NMA)                      |
                Name Assigning Authority
```

「13030」の部分が NAAN で，その後を階層的に構成でき，修飾子も使用できるのです．階層的に資料を把握する場面が出てくる博物館やアーカイブズにとって，使いやすい仕様といえます．

たとえば，総合博物館のウェブサイトの収蔵資料から探すことのできる「さく葉標本」の中で，和名「フイリナガバノスミレサイシン」のページは，

http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/collection/PlePlant/PlePlant00003593.htm

という URL で表示できます．仮に当館での ARK の名前の付方を，学術標本のばあい冒頭に「sp」と付け，続いて前述の URL にならった自然史収蔵資料の区分と標本 ID を使うとしたら，つぎのように表示できるかもしれません（これは物理的オブジェクト）．

ark:/62587/spPlePlant00003593

また先のページにある画像は，つぎのように表示できるかもしれません（デジタルオブジェクト）．

ark:/62587/spPlePlant00003593/do1320/IMG038.JPG

より高解像度のマスター画像は，

ark:/62587/spPlePlant00003593/do1320/IMG038.JPG/pm

と特定できるかもしれません．いずれ京都大学総合博物館で，ARK に対応した学術標本データベースを整備すれば，学術標本の資料目録データ（物理的オブジェクトに対応）や，デジタル化した学術標本のデータ（デジタルオブジェクトに対応）を特定するのに，ARK が使用できるようになるはずです．なお，さしあたり京都大学総合博物館が運営責任部局となって進めている全学事業「京都大学研究資源アーカイブ」の京都大学デジタルアーカイブシステム Peek において使用を開始する予定です（先ほどの ARK 記載例での「sp」にあたる部分に区分を設けます）．

※1 カリフォルニア大学カリフォルニア・デジタル・ライブラリ（CDL）「登録済み NAAN」http://www.cdlib.org/uc3/naan_table.html（参照 2018 年 1 月 31 日，以下オンライン記事の参照日おなじ）

※2 Emma Tonkin. Persistent Identifiers: Considering the Options. Ariadne. 2008, Issue 56. URL: http://www.ariadne.ac.uk/issue56/tonkin［日本語版（国立情報学研究所「学術機関リポジトリ構築連携支援事業」ドキュメント：翻訳資料）を参照した．URL: http://www.nii.ac.jp/irp/archive/translation/PersistentIdentifiers/tonkin/tonkin.htm］

※3 CDL の ARK 関係サイトによる．URL: https://confluence.ucop.edu/display/Curation/ARK

（総合博物館 講師　五島敏芳）

研究資源アーカイブ通信〈12〉
ミューズ・ラボにおける映像ステーション記録映画再開

京都大学研究資源アーカイブ映像ステーションは，平成 20 年（2008）11 月 1 日より京都大学稲盛財団記念館で一般公開され（本誌 23 号記事参照），平成 28 年（2016）2 月～ 4 月に総合博物館内へ移転し 4 月 28 日にリニューアルオープンしました（本誌 36 号・37 号記事参照）．かつて稲盛財団記念館の映像ステーションでは映写コーナーで 2 つの記録映画を映像展示（上映）していましたが，移転後の映像ステーションでは記録映画を再開できませんでした．リニューアルに際し総合博物館の「ミューズラボのモニタを使った映像コンテンツの上映も検討」しているとお伝えしたとおり，その後ミューズ・ラボの機器構成，基盤環境の調査，総合博物館常設映像展示との調整等を進めてきました．平成 29 年（2017）7 月下旬より試験的に開館時間中の映像送出を開始し，11 月 24 日より正式に再開となりました．

総合博物館のミューズ・ラボでは，これまで映像「フィールド サイエンス：その場に立ちその目で確かめる」を展示してきましたが，ここへ映像ステーション記録映画「カラコルム：カラコルム・ヒンズークシ探検の記録」「花嫁の峰 チョゴリザ」を加えてもらいました（別表参照）．これらの記録映画の流れている時間だけ，ミューズ・ラボは映像ステーションの映写コーナーとなります．

京都大学研究資源アーカイブ提供の映像プログラムは，旧映像ステーションと同じ「京都大学のフィールド研究と学術探検」です．あらためて，これらの記録映画から 1950 年代の京都大学の開拓精神や情熱が，多くの来館者へ伝わることを願っています．

なお，このたびの映像再開は，連携部局・支援機構を含む関係者の尽力だけでなく，これらの記録映画の著作権保有者である株式会社 東宝ステラ様のご理解ご協力により，実現したことも銘記しておきます．

（総合博物館 講師　五島敏芳）

ミューズ・ラボ映像プログラム

曜日	時間	映像
水・木	9:30 ～ 16:30	フィールド サイエンス（5 分　繰り返し上映）
金・土・日	9:30 ～ 10:00	フィールド サイエンス（5 分　繰り返し上映）
	10:00 ～ 11:20	カラコルム（80 分）
	11:25 ～ 12:40	花嫁の峰 チョゴリザ（75 分）
	12:40 ～ 13:40	フィールド サイエンス（5 分　繰り返し上映）
	13:40 ～ 15:00	カラコルム（80 分）
	15:05 ～ 16:20	花嫁の峰 チョゴリザ（75 分）
	16:20 ～ 16:30	フィールド サイエンス（5 分　繰り返し上映）

「カラコルム」オープニングタイトル

「花嫁の峰 チョゴリザ」オープニングタイトル

総合博物館日誌（平成 29 年 11 月～平成 30 年 2 月）

展示

▶てんかんをめぐるアート展
2017 年 11 月 1 日（水）～ 11 月 5 日（日）
〈展示解説〉
「作業療法士とめぐる展覧会」
11 月 3 日（金・祝）～ 11 月 5 日（日）

▶大地の形をつかむ―方法としての三次元―
（平成 29 年度企画展）
2017 年 11 月 1 日（水）～ 12 月 17 日（日）
〈関連講演会〉
「地図から読む地形と地域社会―新旧地形図の比較を通じて―」
山村亜希（京都大学大学院人間環境学研究科・准教授）
12 月 9 日（土）

▶足もとに眠る京都
―考古学からみた鴨東の歴史―　飛鳥～室町時代編
（平成 30 年度企画展　京都大学文化財総合研究センター設立 40 周年記念展示　文化財発掘Ⅳ）
2018 年 2 月 14 日（水）～ 6 月 24 日（日）
〈関連講座〉
京都市考古資料館文化財講座（京都アスニー京都学講座の一環）
①「北白川の縄文世界」
千葉　豊（京都大学文化財総合研究センター・准教授）
1 月 27 日（土）
②「稲作のはじまりからクニの成立へ」
伊藤淳史（京都大学文化財総合研究センター・助教）
2 月 24 日（土）

▶大地は語る 2017　宇宙へ！地下へ！地球エレベーター
（ロビー展示・理学研究科地質鉱物学教室との共同開催）
2017 年 11 月 19 日（日）

イベント

▶京都千年天文学街道　第 30 回アストロトーク
2017 年 10 月 21 日（土）
〈講演〉
「かぐや姫が月に還った日は？」
作花一志（京都情報大学院大学・教授）
〈4 次元宇宙シアター〉
「3Dメガネでみる宇宙のすがた～水星と金星～」
青木成一郎（京都大学天文普及プロジェクト室・室長 / 京都情報大学院大学・准教授）

▶わくわくサイエンス　スタンプラリー
2017 年 10 月 28 日（土）～ 2018 年 3 月 31 日（土）

▶ホームカミングデイ（入場料無料）
2017 年 11 月 3 日（金・祝）

▶関西文化の日（入場料無料）
2017 年 11 月 18 日（土）～ 11 月 19 日（日）

レクチャーシリーズ

▶ケニア・ナイロビ郊外で初めて発見された アウストラロピテクス
中務真人（京都大学理学研究科・教授）
2017 年 11 月 11 日（土）

総合博物館セミナー

▶古生物復元という仕事
―サイエンス×アートの新しい形を目指して―
徳川広和（（株）ActoW・代表取締役 / 恐竜・古生物復元造形作家）
2017 年 11 月 10 日 (金)

▶ Progress on the research of fish systematics and evolution through the Tropical Deep-Sea Benthos program
Wei-Jen Chen（国立台湾大学海洋研究所・教授）
2017 年 12 月 15 日（金）

▶パピルス・アーカイブの活用
―ヘレニズム期エジプト社会を再構成する―
石田真衣（名古屋大学人文学研究科／日本学術振興会特別研究員 PD）
2018 年 1 月 12 日（金）

その他

▶洛北附属中連携協定中 2 プログラム「博物館を知る」
2017 年 11 月 18 日（土）

▶京都大学・ヤンゴン大学国際シンポジウム
脊椎動物種多様性のアジア多国間研究ネットワーク
2017 年 12 月 5 日（火）

▶日本学術振興会研究拠点形成事業
第 7 回アジア脊椎動物国際シンポジウム（AVIS7）
2017 年 12 月 6–7 日（水・木）

▶ 2017 国際フォーラム　大学の宝箱を開こう
―京都・台湾の大学ミュージアムのマネジメント
2017 年 12 月 22–23 日（金・土）

▶洛北附属中連携協定中 1 プログラム「博物館で学ぶ」
2018 年 2 月 3 日（土）

入館者数

9,321 名（うち特別観覧：33 団体 1,413 名）

発行日　2018 年 3 月 31 日
編集・発行　京都大学総合博物館　電話　075-753-3272
〒 606-8501　京都市左京区吉田本町　FAX　075-753-3277
http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/